

sattva ~ dharma

藤 近 恵 市

sattvaとdharmaの概念は、仏教以前のヴェーダ・ウパニシャッドにあり、仏教はこれらの概念を取り入れて、独自の思想を形成してきた。本論稿では、原始仏教に於けるsattvaとdharmaの関係を踏まえて、初期大乘経典への思想的展開を検討してみたい。その基本的な内容は、パーリ『Vinaya』「Mahāvagga」などに見られる梵天勸請・初転法輪の箇所であると考えられる。ここでは、sattvaとdharmaについて次のように言われている。

私によって証得されたこの法は、甚深であり gambhīro、理解しがたく duddaso、悟りがたく duranubodho、寂靜で santo、すぐれており paṇīto、分別の領域を越えており atakkāvacaro、微妙であり nipuṇo、賢者によって知られるべきものである。——略——

執著を好み alaya rāma、執著を楽しみ alaya rāto、執著に喜んでいる alaya sammudita 人々によつては この此縁性であり縁起であるところの道理は理解し難い。——略——私の心はこのように精察して無関心に傾いて説法には傾かない。——略——そこで実に

私は梵天の勸請を知って、また、衆生 satta にたいする慈しみ karuṇā により、仏眼によつて世間を観察した。——略——梵天サハンパティは実に、私は世尊より説法についての機会が与えられたと思い、私に敬礼して、右繞して、ただちに消え去った。

(Vinaya Mahāvagga, vol. 4~7)

このようにブッダは、執著する人々に、甚深なるダンマを理解させることは不可能であると思い、沈黙を続けていた。しかし、梵天サハンパティの三度に渡る勧めにより、衆生 satta にたいする慈悲の心を起こして、ダンマを説く決意をする。すなわち、sattvaとdharmaの基本的な関係は、「沈黙↓勸請↓慈悲↓説法」と言う形式で、梵天勸請・初転法輪の記述に内包されていると考えられる。

この引用文と類似した内容は、『マハーヴァスツ』・『ラリタヴィスタラ』・『過去現在因果経』・『太子瑞应本起经』・『仏本行集经』・『ブッダチャリタ』・『方广大庄严经』・『普曜经』・『仏所行讚』などの仏伝文学にある。平川博士によれば、こ

これらの仏伝文学は、おもに仏陀の成道までの過程が記述されていて、成仏以後の伝記は簡略、あるいは、不完全であると指摘している。また、このような仏伝の特徴は、カニシカ王の統治した時代に、生存したと伝えられているアッシュバ、ゴーシャ以前の仏伝に共通した特徴であると述べている。⁽¹⁾

このように、原始経典や仏伝文学では、『Vinaya』『Mahāvagga』と同様に、梵天勸請・初転法輪に至る成道過程で、執著する衆生 *sattva* に対して、ブッダの慈悲や救済の精神から法 *dhamma* を説く内容に成っている。それでは、大乘経典の中で、「沈黙→勸請→慈悲→説法」の形式である梵天勸請・初転法輪の思想は、どのような形態で受け継がれているのであろうか。その点について考察を試みたい。

『八千頌般若経』では、『Vinaya』『Mahāvagga』に類似した内容で般若波羅蜜を説いている。

そのとき、神々の王であるシャクラが欲界の神々とともに。——略——世尊にこう申し上げた。世尊よ、般若波羅蜜は甚深です *gambhīra*。世尊よ、般若波羅蜜は理解しがたいものです *durava-gāha*。世尊よ、般若波羅蜜は見がたいものです *duridṣa*。世尊よ、般若波羅蜜は悟りがたいものです。 *duranubodha*。——略——このようなことから如来阿羅漢正等覺者は無上正等覺をさとって、菩提樹の下の悟りの座にすわっていたとき、そのころにはうれいがなく、法を説こうという気がおこらなかった。——略——

sattva → *dharma* (藤 近)

世尊よ、稀なることです。世間の人々は、あらゆるものに執著するのに、あらゆるものに執著してはならないという、人々の喜ばれない法が説かれるとは。

(Vaidya, 151, 19~152, 9)

このように、『Vinaya』『Mahāvagga』と同様に、世尊の沈黙に対して、シャクラや欲界の神々の勸請があり、あらゆるものに執著する人々に、般若波羅蜜と言う甚深で理解し難い法が説かれている。

また『八千頌般若経』では、転法輪について

そのとき、何千という多くの天子が空中で歡喜踊躍して衣を振りながら、「実にジャンブドヴィーバにおいて、二度めの転法輪 *dvitīyaṃ dharma cakṛa pravartanam* を見る。」と言った。しかしながら、そのとき世尊は上座のスプーティ長老に言われた。「スプーティよ、これは二度めの転法輪ではない。また、いかなる法であらうとも、転じはじめることも、転じおわることもないのである。スプーティよ、このようなものが菩薩大士の般若波羅蜜である。」

と説いている。

(Vaidya, 101, 19~101, 22)

ここでは、第二の転法輪が転ぜられたことで、神々は喜んでゐる。しかし、世尊がスプーティに説いているように、転法輪には、第二のものがあるのではなく、始めも終わりもなく永遠にダルマの輪が回転することであり、それが菩薩大士の般若波羅蜜であると述べている。この記述は、『道行般若

經』や『小品般若經』にもあり、『八千頌般若經』成立の初期段階から、このような思想があったと考えられる。

『法華經』「方便品」の偈文では、仏陀の成道場面について次のように説かれている。

私はそのことを、菩提樹下のさとり座で知り、三七日のあいだとどまっていた。——略——これら愚かな者たちは私が説いた法を悪し様に言い、誹謗したことによって、地獄におちるであろう。私は何も説かないほうがよいようだ。今日こそ、私は寂靜なる涅槃にはいろうと。しかしながら、過去の諸仏の巧みな方便がいかなるものであったかを思いだして、私もまた方便として、この仏陀の菩提を三種類に分別して、ここに説こう。——略——シャーリプトラよ、このように知って、私は、ヴァーラーナシーに赴き、そこで寂靜の境地なる法を、五人の比丘たちに、方便をもって説いたのである。このようにして、私の法輪が転ぜられた。

(Wogihara. 53, 5~55, 12)

ここでは、法 dharma を理解できない人々に対して、何も説かずに涅槃に入ろうとするブッダの心境が描かれている。しかし、過去の諸仏の巧みな方便を回顧して、法を三種類に分けて説き始めている。この偈に対応する長行は、一仏乗を示す理由に相当する箇所である。ここでも、梵天勸請・初転法輪の内容が受容されていると考えられる。

『法華經』の「譬喩品」では次のような転法輪が説かれて

いる。

「かつて世尊はヴァーラーナシーの仙人墮処の鹿野苑で法輪を転ぜられましたが、今日再び、世尊は第二の無上なる法輪 anuttaraṃ dvitīyaṃ cakram pravartitam を転ぜられたのである。」と。そして、この時、これらの天子たちは、次の詩頌を歌った。「世間において比類なき人よ、あなたは法輪を転ぜられました。ヴァーラーナシーにおいて、偉大な勇者よ、諸蘊の生滅を。指導者よ、ヴァーラーナシーでは、法輪がはじめて転ぜられたのですが、いまここでは第二の法輪が転ぜられました。すなわち、指導者よ、彼らには、にわかには信じがたいものが、今日説かれたのです。われらは世間の保護者の面前で、多くの法を聞いてきました。しかし、かつてこのような法を聞いたことはありません。」

(Wogihara. 67, 23~68, 4)

ここでは、世尊が今日再び、第二の無上なる法輪として信じがたいダルマを説いたとされている。長行では、世尊が巧みな方便や譬喩を用いて、様々な道を示した内容に成っている。この背景には、「方便品」で説かれた、真のダルマを衆生に理解させて、正しい悟りに導き入れる目的があると言えるだろう。

『十地經』の場合は、『Vinaya』「Mahāvagga」の梵天勸請・初転法輪の形式を受容して、世尊の代わりに金剛藏菩薩を、梵天の代わりに解脱月菩薩を位置づけた会話にしてい

る。すなわち、金剛藏菩薩は沈黙を保ち続けているが、解脱月菩薩の勧請により、第一地から説法が開始される。その箇所は、サンスクリット文の序文、漢訳の『漸備一切智徳経』、『六十華嚴』、『八十華嚴』では、第一地の始まりの部分に見られる。

その時、金剛藏菩薩は、これら十の菩薩地の名前のみを説きおわって、沈黙してしまい、決して、分別して説こうとはしなかった。そこで、彼らはつぎのように思った。「いったい、どうしてなのだろうか。——略——それには、いかなるわけがあるのであろうか。」そこで、解脱月と名づけられた菩薩は、この大衆の心を観察して詩頌によってうたいつつ、金剛藏菩薩に問うのであった。——略——そのとき金剛藏菩薩にはつぎのような考えがうかんだ。

「衆生のうちで、このような智慧を理解することはむずかしい。いったいだれが、この最高なる智慧を信じて疑わないであろうか。」と。——略——私（金剛藏菩薩）には、無量なる如来の威神力 *aprameyaḥ sugatānubhāvah* が顯れて（菩薩の十地を）説くことができるのだ。」（Kondo, 7, 8~15, 11）

このように、解脱月菩薩の勧請により、金剛藏菩薩が無量なる如来の威神力を受けて、迷える衆生のために、第一地から説法を開始する。つまり、『十地経』は、如来の威神力に支えられた金剛藏菩薩によって、仏陀の成道以後の説法内容が述べられている。

sattva と *dharma* (藤 近)

以上のように本論稿は、『Vinaya』『Mahāvagga』の梵天勧請・初転法輪に於ける *sattva* と *dharma* の関係に着目して検討してきた。その基本的な関係は、「沈黙↓勧請↓慈悲↓説法」の形式で表現することが可能である。また、平川博士は、アシュバゴーシャ以前の仏伝系統は、仏陀の成道までの記述で、成仏以後の内容は不完全であると指摘している。初期大乘経典が仏伝文学の延長上に位置づけられるならば、般若波羅蜜の無限の転法輪、『法華経』の第二の転法輪、『十地経』の金剛藏菩薩が如来の威神力により説き始める転法輪など、仏陀成道以後の説法形式を取り入れて、新たな経典を作成していったのではないかと推測される。すなわち、初期大乘では衆生救済のために、更に法輪を回転させて、仏陀成道以後の詳細なる記述を導入した形態で、経典を展開させたのではないだろうか。そこには、大乘仏教の転法輪により、執著し、迷える衆生 *sattva* の救済ために法 *dharma* が説かれた理由が示されているとも考えられる。

1 平川 彰『インド仏教史』上巻（春秋社）三三三頁〜三四〇頁。

〈キーワード〉 *sattva* 'dharma' 梵天勧請、初転法輪
(大正大学副手)